



Title	Clinical and Histologic Study of Endoscopic Duodenitis
Author(s)	川本, 博司
Citation	大阪大学, 1990, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/36841
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・(本籍)	かわ	もと	ひろ	じ
	川	本	博	司
学 位 の 種 類	医	学	博	士
学 位 記 番 号	第	9 0 0 7	号	
学位授与の日付	平 成	2 年	3 月	5 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学 位 論 文 題 目	Clinical and Histologic Study of Endoscopic Duodenitis (内視鏡的十二指腸炎に関する研究)			
論 文 審 査 委 員	(主査)	垂井清一郎		
	教 授			
	(副査)	森 武貞	教 授	鎌田 武信
	教 授			

論 文 内 容 の 要 旨

〔 目 的 〕

十二指腸炎は十二指腸粘膜の炎症性変化に与えられた名称であるが、その疾患としての独立性やその病態、臨床経過（なかんずく十二指腸潰瘍との関係）については種々議論のあるところであり、今日にいたるもまだ定説はない。また、十二指腸炎の診断は、従来生検標本を用いて病理組織学的になされることが多かったが、内視鏡的に十二指腸炎が診断できるかどうかを病理組織学的検討との対比でしらべた研究は乏しい。そこで我々はendoscopic duodenitis（内視鏡的十二指腸炎）の実態を明らかにする目的で、内視鏡的に十二指腸炎と診断された症例につき、組織像、内視鏡所見、臨床経過ならびに併存病変を対比検討した。

〔 方法ならびに成績 〕

1. 最近3年間に上部消化管内視鏡検査を行った1242例のうち、内視鏡的に十二指腸粘膜に発赤、扁平びらん、疣状びらんのいずれかをみとめるものを「内視鏡的十二指腸炎」とすると、上記1242例中313例（25%）がこれに該当した。そのうち、十二指腸潰瘍や十二指腸潰瘍瘢痕をとまなうものを除外した93例（7%）を原発性内視鏡的十二指腸炎とした。内視鏡的十二指腸炎（原発性）をその内視鏡所見から、発赤型、扁平びらん型、結節（疣状びらん）型の3型に分けると、それぞれ52例（56%）、18例（19%）、23例（25%）であった。

内視鏡的十二指腸炎（原発性）93例中、最短1ヶ月から最長3年間に内視鏡的に経過観察しえた23例について、内視鏡像の変化を検討した。十二指腸炎の内視鏡所見の変化は、扁平びらん型では7

例中3例は正常化し、4例は発赤型に移行した。発赤型では13例中5例が発赤型のままで、3例が扁平びらん型あるいは結節（疣状びらん）型に移行し、5例は正常化した。結節（疣状びらん）型から他の型に移行した例はなかった。経過中、内視鏡的十二指腸炎（原発性）から十二指腸潰瘍への移行、あるいはその逆は1例もみとめられず、したがって内視鏡的十二指腸炎（原発性）は十二指腸潰瘍とは異なった病態と考えられた。

2. 十二指腸粘膜生検を行った十二指腸正常例56例、十二指腸潰瘍あるいは同癒痕31例、内視鏡的十二指腸炎（原発性）32例の計119例の生検標本について、Forrester およびWhitehead の分類にしたがって病理組織学的に炎症の程度を4段階に分類して検討した。組織学的炎症高度例（grade II, III）は内視鏡的十二指腸炎（原発性）では34%、十二指腸潰瘍と同癒痕の症例では45%と高率であり、内視鏡的十二指腸正常例では2%と少なかった。

内視鏡的十二指腸炎（原発性）の型別では扁平びらん型、結節（疣状びらん）型に組織学的炎症高度例がそれぞれ80%、67%と高率にみとめられた。発赤型については組織学的炎症高度例は5%と少ないものの、経過観察によって扁平びらん型や結節（疣状びらん）型との間に移行の見られる例があることより、他の2型同様、十二指腸炎の病型のひとつと判断される。

3. 胃病変の合併率についても検討した。胃粘膜の発赤、びらん、出血などの所見（「内視鏡的胃炎」）は内視鏡的十二指腸炎（原発性）例では52%にみとめられ、十二指腸潰瘍ならびに同癒痕例の20%内視鏡的十二指腸正常例の18%に比して高率であり、内視鏡的十二指腸炎（原発性）と内視鏡的胃炎の間に病因的な関連性が示唆された。胃潰瘍の合併率については、内視鏡的十二指腸炎（原発性）例と十二指腸潰瘍ならびに同癒痕例、および内視鏡的十二指腸正常例との間に差がなかった。
4. 肝腎疾患に十二指腸炎の合併が多いとする報告が見られるので、肝腎疾患の十二指腸炎合併率についても検討した。定期的に透析を行っている腎不全患者147例では19%に、肝硬変群114例では11%に内視鏡的十二指腸炎（原発性）がみとめられ、肝腎疾患など合併症のない群の5%に比して高率であった。

〔総括〕

1. 内視鏡的十二指腸炎（原発性）は組織学的にも炎症像が高率にみとめられた。
2. 内視鏡的十二指腸炎（原発性）のうち、扁平びらん型は半数以上が発赤型に、発赤型の一部は扁平びらん型あるいは結節（疣状びらん）型に移行したが、内視鏡的十二指腸炎（原発性）より十二指腸潰瘍への移行、あるいはその逆はみとめられず、内視鏡的十二指腸炎（原発性）は十二指腸潰瘍とは異なった臨床経過をもつ独立した病態であることが明らかにされた。
3. 内視鏡的十二指腸炎（原発性）の半数以上に内視鏡的胃炎の合併をみとめ、両者間に病因的な関連性が示唆された。
4. 透析を行っている腎不全患者、肝硬変患者に内視鏡的十二指腸炎（原発性）を比較的高率にみとめた。

論文の審査結果の要旨

本研究者は、十二指腸内視鏡検査を行った1242例のうちより十二指腸粘膜に発赤、びらん、結節のいずれかをみとめるendoscopic duodenitis（内視鏡的十二指腸炎）を313例（25%）検出し、さらにその中に、十二指腸潰瘍あるいは十二指腸潰瘍瘢痕をともしない内視鏡的十二指腸炎（原発性）が93例（7%）存在することを見出した。これら内視鏡的十二指腸炎（原発性）例について、内視鏡所見と組織像との対比、経過観察による内視鏡所見の変化、併存病変などを検討した。その結果、内視鏡的十二指腸炎（原発性）では十二指腸粘膜の炎症が組織学的にも裏づけられた。また内視鏡的十二指腸炎（原発性）の経過観察により、発赤型とびらん型の間で相互に移行がみられるが、結節型では容易に他の型に移行しないことを明らかにした。また、十二指腸潰瘍への移行は1例もみとめられず、十二指腸潰瘍にともしない内視鏡的十二指腸炎が存在することを明らかにした。

以上の成果は、いまだその病態や臨床経過の明らかでない十二指腸炎に関して新たな知見を加えたものであり、学位に値すると考えられる。